

令和二年度後期国際協力ボランティア活動報告

～ 次世代 NGO 職員を目指すためのプログラム ～

海外事業部所属
国際協力ボランティア
大垣直哉

はじめに

私は令和二年度の国際協力ボランティアに参加させていただいた。農業研修や NGO のバックオフィス業務など、自分にとってはじめて経験することが多く、とても新鮮な半年間を過ごすことができた。本報告書では、一国ボラの視点から、研修を通じて体験した内容について纏めてみたい。

国際協力ボランティアとは

国際協力ボランティア（旧称、熱帯農業研修）は、将来の国際協力人材を育成することを目的に 1976 年に設立されたプログラムである。熱帯農業研修（国ボラの旧称）では、20 代の若者達がフィリピンのミンダナオ島に派遣され、現地の若者達と汗を流した。これまでに多くの若者達が参加し、オイスカ職員をはじめ、黒柳俊之元 JICA 理事など、多くの国際協力業界で活躍する人材が輩出されてきた。

現行の半年間のプログラムでは、オイスカ本部や研修センターでの業務、プロジェクト視察等を通じて、実際の NGO 活動について理解を深めることができる。修了後には双方の合意の上、オイスカ職員への採用の途が拓けるため、プログラムでの学びを活かしながら NGO 職員として国際協力に携わることができるのも魅力的である。実際、多くのオイスカ職員がこのプログラムを経て職員として活躍している。

自己紹介

大学卒業後、青年海外協力隊（ボリビア派遣）での活動を経て、国際協力ボランティアに参加。趣味はテニス。

活動内容

10月	<ul style="list-style-type: none">・国ボラ活動のオリエンテーション・オイスカ活動に関する説明・西日本研修センターでの研修
11月	<ul style="list-style-type: none">・本部で助成団体への報告書作成補助業務・『富士山の森づくり』視察&ボランティア・『名取市海岸林プロジェクト』視察&ボランティア・NGO 活動紹介小学校訪問同行
12月	<ul style="list-style-type: none">・つみき広場ワークショップ同行・中部研修センターでの研修・小杉ミャンマー駐在代表による講義
1月	<ul style="list-style-type: none">・ネグロス島養蚕プロジェクトについて学習
2月	<ul style="list-style-type: none">・ミャンマーWFPプロジェクトについて学習・助成団体への会計補助業務
3月	<ul style="list-style-type: none">・レイテ島植林プロジェクト報告書作成補助業務・『子どもの森計画』事業について学習&助成団体報告会への参加・荏原パプアニューギニア駐在代表による講義

その他：職員との外部研修参加等

活動詳細

オイスカ活動に関する説明

最初の一週間は本部内にある海外事業部（海外開発協力課、子供の森計画課、人材育成課）、普及啓発部（国内環境課、海岸林プロジェクト）それぞれの部課長から事業に関して説明をいただいた。一 NGO としては珍しく、多種多様なことに取り組んでいて、60年の草の根の国際協力の知見を活かし、国内外で活動を展開している点には感銘を受ける。全体像を把握する素晴らしい機会となった。

西日本研修センター



研修生達と農作業

西日本センターでは、3週間の農業研修に参加した。アジア太平洋、ラテンアメリカから集まった同世代の若者達と切磋琢磨しながら、有機農業を学ぶのはとても刺激的であった。



大自然での農業は本当に楽しい！

センターの生活は毎朝の国旗掲揚からはじまり、全員で掃除、その後は農作業ととても忙しかつたが、研修生達は先陣を切って作業に励む農業指導員についていくように必死で頑張っていた。私も一緒に混ざって、播種、草取り、マルチかけ、ぼかしづくり、コンポスト、草刈り、収穫販売準備などを行った。大変ではあったが、研修生と一緒にご飯を食べ、風呂に入り、夢を語り合う時間は振り返ると貴重であった。日本にいなながらも、海外の農村について理解を深めることができた。加えて、研修には地元の方々との交流と社会科見学も盛り込まれていて、多くの素敵な人達と知り合うことができた。

印象に残っているのはやはり研修生の頑張りである。研修は全て日本語で行われるため農作業で疲れていても、合間を見つけては一生懸命日本語を勉強する研修生達の姿は私のオイスカ生活を続けていく上で大きな励みとなった。うまく説明はできないがセンターはとにかくあきらめず頑張るといった“オイスカスピリット”で溢れていた。オイスカの国際協力は基本的に研修センターで育った若者達と協働でプロジェクトを行う。これからは、今回出会った研修生達と海外の農村という舞台上で一緒に仕事をしていけるのが楽しみである。



センターで育った有機野菜のご飯がとにかく美味しい！



みんなで自国の料理をつくりあう。
今回は猪を使ったモンゴル料理

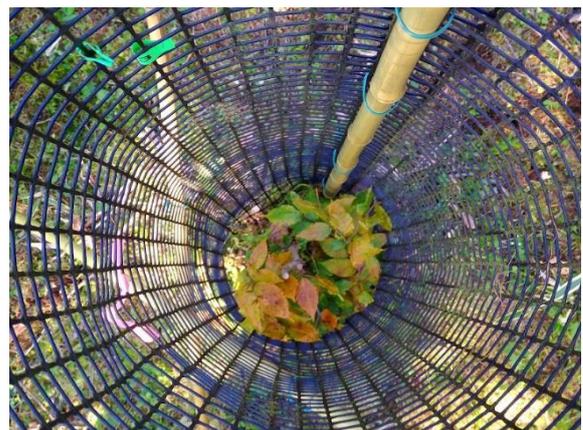
本部での会計報告書作成補助業務

本部に戻ってからは、長調査研究担当部長の下でマングローブ植林案件の報告書作成補助業務を行った。オイスカは NGO なので、海外プロジェクトを実施する際に助成金申請を行うことがある。そのため、いただいた助成金がどのように使われたのかを明らかにし、ドナー（支援者）に対して会計報告書を作成するのはアカウンタビリティを保つ上でも必須の業務である。今回は、アジア太平洋 5 か国でオイスカが実施しているマングローブ植林プロジェクトの報告書作成業務を通じて、植林の知識、助成団体との調整業務について理解を深めることができた。

富士山の森づくり視察&ボランティア



賛同企業のボランティアの方々と

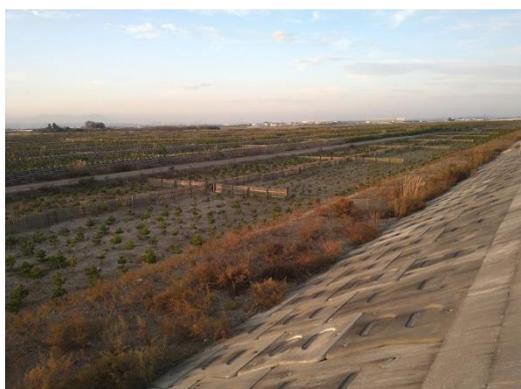


順調に育つ植林樹

2日連続で『富士山の森づくり』の現場を訪れ、鹿害から苗木を守るためのフェンス設置作

業を行った。プロジェクト現場は標高 1500m ほどに位置しており、空気は美味しく、数年前に植樹された広葉樹が見事に育っていた。ちょっと横を見ると富士山の頂上が見え、霧が立ちこむこともあり、まるで雲の上で植林活動している感覚であった。世界文化遺産にも登録されていて、日本人の心でもある富士山の森林再生に貢献できるのは素晴らしい体験であった。

名取市海岸林再生プロジェクト視察&ボランティア



海岸林プロジェクトの現場（名取市）



全国から集まったボランティアの方々

オイスカが宮城県名取市で実施している『海岸林再生プロジェクト』の現場を二泊三日で訪れた。一 NGO が 100 ヘクタールの土地に東日本大震災の津波で奪われたクロマツ林を再生するというスケールは圧巻だった。空から見ると順調に育つクロマツ林に見えるが、その中にはオイスカ職員、地元ボランティアの方々、賛同企業のボランティアの方々、学生など多くの人が作業する姿があり、松脂に汚れながら一生懸命未来への再生に向かって働く大先輩方の姿はエネルギーに溢れていた。東京にいと再建されつつある街並みを見て、復興が順調に進んでいるように錯覚してしまうけれど、例えば海岸林の場合は成林するまでに 50 年以上かかる。関心を持ち続けることは大切なことだと改めて感じる経験となった。

NGO 活動紹介小学校訪問同行



小学校にオイスカ活動を紹介する林広報室長

林広報室長が都内の小学校でオイスカの活動紹介をするとのことで、学生インターン生と一緒に同行した。NGOの活動を広く知ってもらうのも広報活動の大事な仕事である。純粋な子ども達はオイスカの海外での活動、貧困問題を初めて知りショックを受ける様子もあったが、講話の最後には自分にもできることをしたい！と意気込んでいる様子であった。私もその一員であるが、多くの若者がNGOを目指し、世界を良くするためのボランティア➡プロフェッショナル集団という社会認識にも繋がれば良いと感じる。また、講和後には校長先生が給食をご馳走してくださった。滅多にない機会を得られて、小学生時代が懐かしく感じた。

つみき広場ワークショップ同行



つみき広場。子ども達はみんな興味津々だ

都内のある小学校を訪問し、オイスカの国内環境課が実施しているつみき広場ワークショップに参加した。下準備は大変であったが、本番は子ども達とつみきで一緒に遊ぶことができ、純粋に楽しかった。当日は、オイスカ会員でもありつみき広場ファシリテーターも務める西湖先生（元幼稚園教諭）も加わり、子ども達は大喜びだった。何より、遊びを通じて、日本の森林減少問題に考える教育機会になっているのが素晴らしかった。

中部研修センター



技能実習生修了式

日本で3年頑張った研修生達の姿は誇らしかった

12月の3週間は愛知県豊田市に位置するオイスカ中部研修センターに滞在した。冬場に外で農作業するのは大変で、熱帯地域から来たマレーシア、タイの研修生達にとっては特に大変な様子であった。私にとってもしんどい作業ではあったが、同時に農家の方々への感謝の気持ちがいよいよ芽生え、食料生産者の有難みを身に染みて感じる事ができた。

農作業以外にも中部研修センターでは、技能実習生の受け入れにも積極的で、研修期間中は総勢 15 名のマレーシア人とフィリピン人研修生達と一緒に生活した。特に印象深かったのは、ミャンマー人技能実習生を受けている養豚場『トヨタファーム』の鋤柄社長を訪問したことである。ミャンマーの農村の生活状況の説明から、豚コレラの危機を社長と一緒に乗り越えて技能実習生として頑張り、故郷に家を建てたお話には感動した。また、同社で研修を終えた過去のミャンマー人技能実習生たちは、習得した豚の人口受精技術をミャンマーで成功させている。世間では技能実習生制度の悪いニュースばかりが取り沙汰される傾向があるが、オイスカが実施している技能実習制度はオイスカ会員の暖かい会社に迎えられ、実際に技能を習得した研修生達が故郷の発展に貢献していることを知ることができた。



里芋の収穫販売準備。農業研修生達と一緒に管理の大切さを学んだ

農作業と技能実習生への理解に加え、センターに滞在中はオイスカ会員の皆様を訪問する機会に恵まれた。会員の皆さまは心が温かく、オイスカを懸命に応援してくださっていることを感じた。お話を聞く中で、人生の大先輩として激励下さる方もいて、多くを学ばせていただく機会となった。

小杉辰雄 ミャンマー駐在代表による講話

オイスカには海外研修センターに赴任し、プロジェクト運営を行っている駐在員が存在する。今回は、コロナ禍の影響で運よく帰国していた小杉辰雄駐在員にお会いし、お話を伺うことができた。小杉駐在員は会社員勤めの後、オイスカに入団し、パキスタン、バングラデシュ、インドでの現地駐在を経て、現在はミャンマーの中央乾燥地帯にあるオイスカセンターで駐在代表を務められている。農業発展が困難な中央乾燥地帯において、オイスカはだだ

ポック方式を導入し、フィリピンで開発した通称オイスカ米の栽培に成功している。ほかにも換金作物栽培や四国センターで地域開発コースを修了したオイスカ研修生OB達が食品加工にも取り組んでおり、現地でオイスカの活動が住民の生計向上に寄与していることを知ることができた。

東京本部

ネグロス島養蚕プロジェクトのケーススタディ



本部に飾られているネグロス島で生産された繭。
フィリピンの伝統衣装にも使われている。

フィリピンでのオイスカ活動の歴史は長い。現在は、渡辺重美オイスカバゴセンター所長を筆頭に、ネグロス島養蚕プロジェクトを展開している。本事業は砂糖価格の暴落を受けて貧困に陥ったネグロス島において1989年に開始し、これまでにJICAパートナー基金、外務省草の根人間の安全保障基金などの助成を経て、現在は外務省 NGO 無償連携基金を用いてプロジェクトが実施されている。

今回は本部で同プロジェクトの運営管理を担当している萬代人材育成からお話を伺うことができ、オイスカの草の根開発の取り組みについて理解を深めることができた。お話の中で印象に残っているのは、現地に根を張ったオイスカらしい国際協力の大切さである。というのは、同地でのネグロス島養蚕プロジェクトは国連機関なども開発ニーズだと考え過去にプロジェクトを実施したが、上手くいかなかった。

過去の失敗事例も含めて萬代部長が振り返るところ、期間の決まったプロジェクトは現地でのダイナミクスに柔軟に対応することが難しく、期待した効果を持続させることは難しい。同プロジェクトも当初は日本から蚕種の輸入、生糸の日本市場への輸出を念頭に置いていたため開始当初は苦労したそうである。けれども、地元で根付いた持続的な国際協力の重要性に気づいてからは、プロジェクトの方針も転換し、だんだんと現地で養蚕業が定着していった。

これまでに現地農家に泊まり込みで技術移転するオイスカ研修生 OB の存在、現地に根付き過去 40 年以上同地に駐在している渡辺所長、日本人養蚕専門家、資金協力をしてくださった会員の方々のオールジャパンの協力があって、現在では養蚕はネグロス島の地場産業にまで成長した。

お話を伺うことを通じて、現地に根付いたオイスカの“人づくり”で育った研修生達の活躍を後方支援することが本部の一番大事な業務であり、バックオフィス業務も力を入れて頑張ろうと思うきっかけとなった。

ミャンマー-WFP プロジェクトのケーススタディ



藤井課長による本部での OJT の様子

2 月は藤井啓介海外事業部課長の下、ミャンマーの開発問題をケーススタディとし、貧困プロフィールといった二次資料を用いた課題の分析を行った。藤井課長は 7 年半ミャンマーに駐在していたので、現地事情に詳しい。そのため、二次資料で想像したことを現地駐在経験を基にフィードバックをいただき、資料から現地事情を読み取る能力の涵養に努めた。また、藤井課長はミャンマー駐在時代に WFP（国連世界食糧計画）と協働プロジェクトをコーディネートした経験もあるため、国際機関とのパートナーシップについても理解を深め

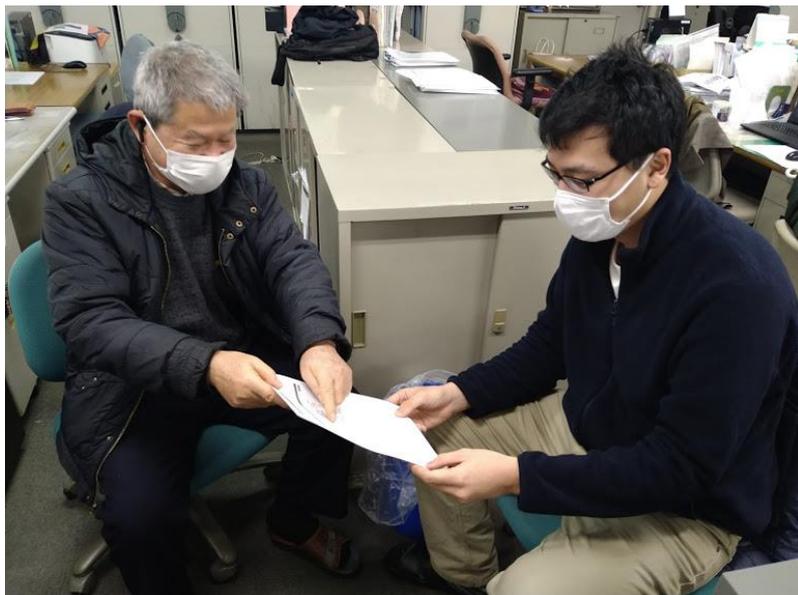
ることができた。お話を通じて、大事なことは現地に根差し、インフラ整備がされていないミャンマーの農村で活かせる適正技術を見極め、有機農業技術普及事業を実施することだと感じた。現場での経験も参考にしながら、農村開発について理解を深めることができた。

プロジェクト会計報告書作成補助

年度末は海外プロジェクトの会計業務で忙しい。そのため、この機会を利用して、海外開発協力課職員でローテーションしながら、会計業務を OJT で学んだ。助成金で実施しているプロジェクトの領収書を一枚も漏れないように確認し、報告書用の Excel に打ち込んでいくのは地道な作業で骨が折れる。しかし、助成金をいただいている以上、支援者（ドナー）の方々に対するアカウンタビリティは必須であり、本部職員が会計処理をきちんと行うからこそ海外の現場でオイスカ現地職員が膨大な事務作業にとらわれず、現地のために勇躍できる。様々な職員から手ほどきを受け、プロジェクト管理の根幹である会計業務について理解を深めることができた。

荏原美知勝パプアニューギニア駐在代表による講話

荏原駐在代表は熱帯農業研修（現国ボラ）に参加して以降、海外のオイスカの現場で農業技術普及に尽力されている。フィリピンのミンダナオ島に3年、パラオに10年、パプアニューギニアに27年間駐在しており、海外現場での経験は40年にも及ぶ。荏原駐在員は焼畑農業が主流で森林減少が深刻化していたパプアニューギニアにおいて、定置型農業を普及させた第一人者である。



荏原駐在員。質問に全て応えてくださった

今回は荏原駐在員からご自身の駐在経験、特にパプアニューギニアでの経験についてお話を伺うことができた。現場について様々なお話を伺ったが、一番印象に残っているのは駐在員としての姿勢である。荏原駐在員自身、「共に生きる」という考え方を一貫して国際協力に携わられてきた。けれども、最初にパラオに行った際は指導するという立場で現地の人達と関係がうまくいかなかったこともあった。そのときに悟ったことが「現地の人達が受け入れてくれるから自分が入れる。」ということであり、その発想がきっかけとなって多くの現場で国籍、民族、宗教、言語、文化の違いを乗り越えて、駐在員として活躍されてきたのだと感じる。私も海外志望なので駐在員として現場で培った哲学に触れることができたのは貴重な機会であった。

国ボラを終えて

振り返ってみるとあっという間の半年間であった。ボリビアの農村にいたことで、第一次産業（農業）の大切さに気づき、日本には存在しえない社会格差を目の当たりにしたことで、人は食べ物があれば生きていけると悟った。こうしてみると簡単だが、物質が身の回りに溢れ、快適な日本の都市に暮らしていると想像するのも難しい。そんなことで、帰国したらもっと学んで農村開発に貢献したいと意気込んでいたところ、偶然にもオイスカを発見し、何も考えずに国ボラに参加してみた。

率直な感想を述べると参加して本当に良かった。世界中から集まる研修生達と知り合い、農業、実際のNGO業務、草の根の環境保全プロジェクトについて勉強できる良い機会となった。なにより、一番よかったのはオイスカを通じて出会った人との出会いである。不思議なことにオイスカ職員や応援して下さる会員の方々、ボランティアの方々には利他の精神に溢れ、素晴らしい人達しかいなかった。そんな方々との交流を通じて、自らを振り返り、少しでも人間として謙虚になれたことは何よりの収穫である。

国際協力といっても、先進国の人達が自らを上位と位置づけ、開発途上国の人達を下位の存在としてリアリティを押し付けるほど傲慢なことはない。残念ながら様々な現場でそのような場面に出くわすことも少なくない。ただ、オイスカの場合は全く雰囲気が異なるように感じる。海外の農村地域から次世代の若者達を研修で育て上げ、彼らに地元コミュニティでリーダーとして活躍してもらうことをモットーとしている団体である。研修期間中に「専門家は現地にすでにいる。それをサポートするのがオイスカの仕事だ。」と何度も聞いた。多くの人達との交流を通じて、多くの学びを得た。オイスカスピリットを持った者同士で、一緒に働くのはワクワクに溢れている。

来年度からはオイスカ職員として働く予定だ。国ボラ研修の延長線ではあるが、今まで経験させていただいたことを活かして、頑張っていきたい。

国ボラへの参加を考えている人へ

国際協力の勉強というと問題を深掘することに焦点がいきがちかもしれない。ただ、大切なのはどうかして解決していくことである。草の根レベルでの国際協力分野を志望している人にとって、国ボラでの参加は“解決策”を踏まえて国際協力を理解する上で貴重な機会となるだろう。冒頭でも述べたが、国ボラを経て国際協力業界で活躍している人たちは実に多い。

国ボラに決まったプログラムはなく、むしろ個人に合わせて柔軟に対応してくださる。私自身、日々希望を出しては学びの機会をつくっていただいたこと多々あった。そして、その学びは決して無駄にはならず、修了した後にはオイスカ職員としての道が拓けるのも魅力的ではないだろうか。

国際協力業界で頑張ろう！何よりも自分のためではなく、利他の精神で農村の人達のために、現地の人達と一緒に頑張ろう！という気概を持っている人は参加してみることをお勧めする。



すべての生命は密接につながっている！